

INSIGHTOUT

ROUND #8 [生活動力2009]

二〇〇九年、
「第三の安心」に、
人は動く。

生活総研

生活動力2009

The Dynamics of Japanese Sei-katsu-sha

第三の安心

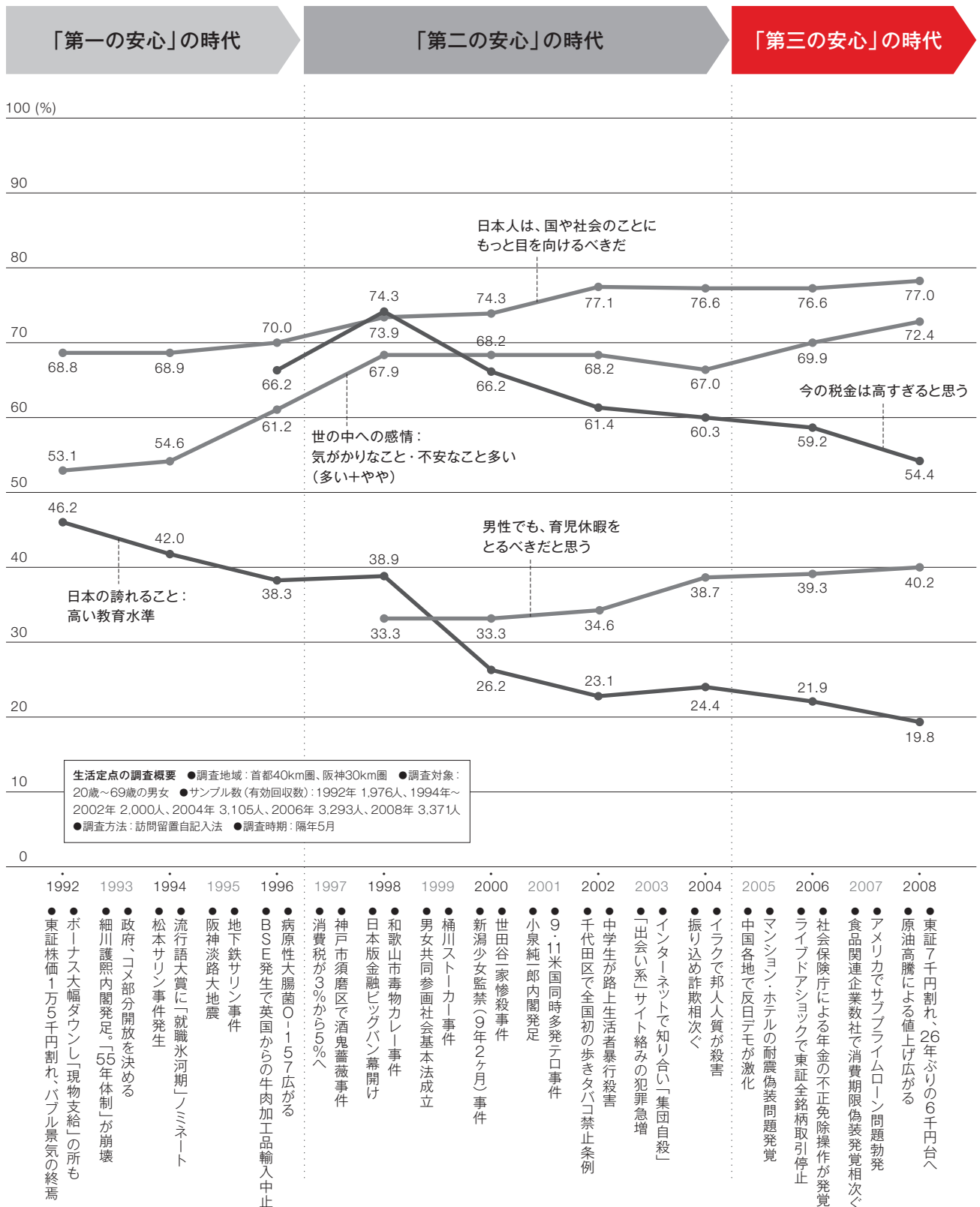
社会を修理する生活者

生活者は今、新しい「安心づくり」を始めています。バブル崩壊の直後から、自らの手による安心づくりは始まってはいましたが、その範囲はせいぜい自分の身の回り中心でした。ところが昨今、不安のスケールが世界規模、地球規模へと大きくなったことで、生活者の安心づくりの範囲も、社会全体へと広がっていったのです。さらに、今回の安心づくりにはもう一つ特徴があります。それは多くの人たちとみんなで行う、という点です。社会という巨大な存在を相手にするからこそ、小さくてもいいから、一人でも多くの人の力と知恵を合わせて、社会の揺らぎを鎮めていこう、という考え方です。「社会全体の安心づくりをみんなで行う」。この新しいつくり方で生まれる安心を、私たちは「第三の安心」と名づけました。第一の安心がひとりで行う、自分のための安心づくり～「じぶん定め」、第二の安心が家族や仲間と一緒に、自分の身の回りのための安心づくり～「まわり固め」だとしたら、第三の安心は、生活者がみんなと一緒に、社会全体のための安心づくり～「しくみ直し」です。「しくみ直し」は、生活者の考え方を利己から利他へ、さらに社会全体のことを第一義に考える、利他を超えた「利多」へと進化させるでしょう。そして、こうした動きの積み重ねこそが、生活者による社会の修理を進めていくことになるのです。

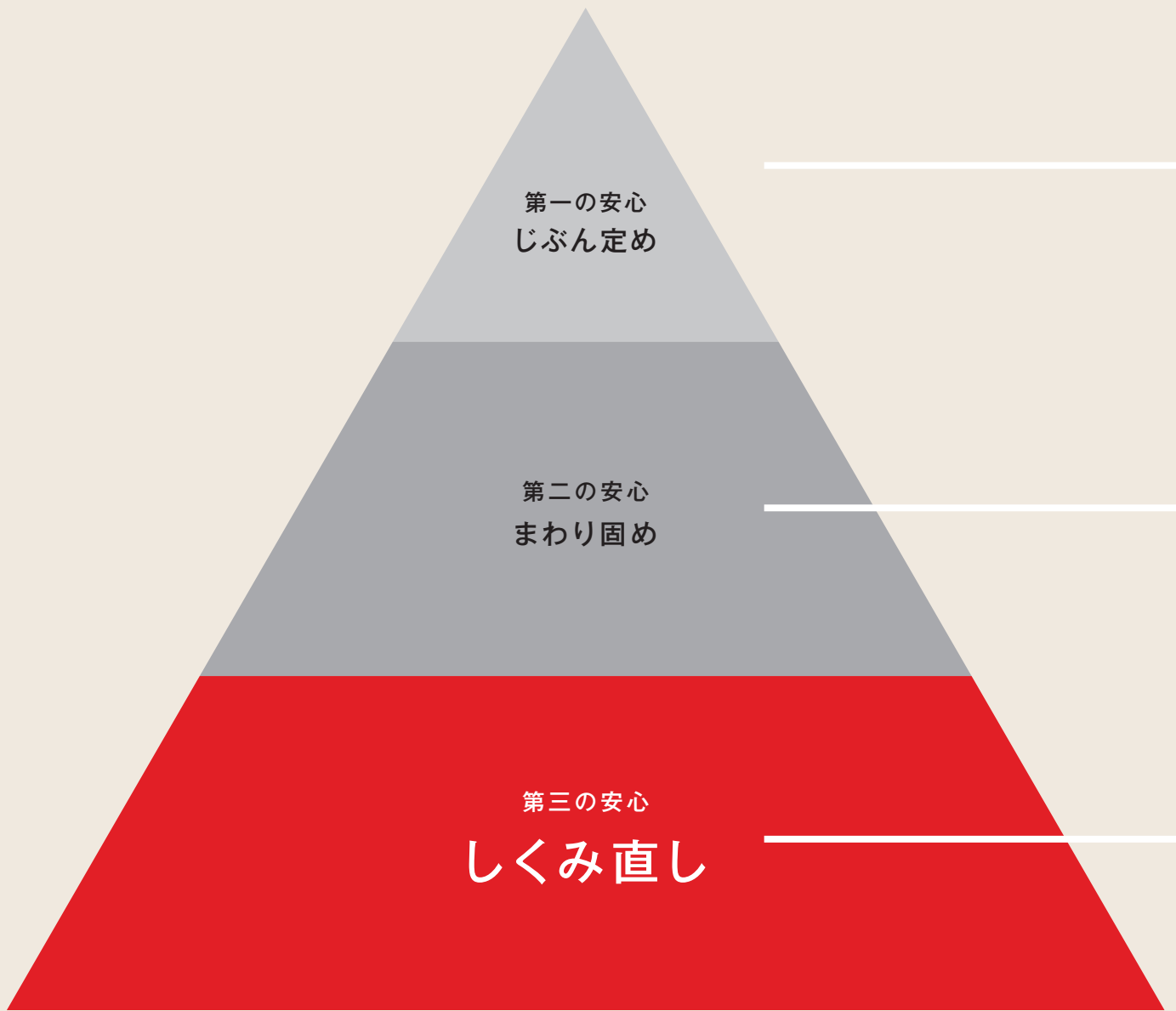
<http://seikatsusoken.jp/anshin>

ウェブサイトにて、「新しい安心のつくり方」に関する研究報告、「第三の安心」の関連資料などをご紹介します。ご活用ください。

「第三の安心」が生まれるに至った背景を、生活総研が隔年で実施している「生活定点」調査のデータと時代環境を絡めて描き出します。生活者の意識変化を時系列につなげた「生活波形」を、各年の代表的な出来事とあわせ観ることで、過去から今にかけての生活者の時代との向き合い方、さらにどのような安心づくりを志向するに至ったのかが理解できます。



「第三の安心」とは…



個の

ひとりでつくる安心

1989年末、最高値をつけた株価が急落。バブル時代が終わり、生活者の安心づくりが始まります。贅沢をやめ、冷静に自分の能力や将来の目標を見極める「じぶん定め」がこの時代の安心のつくり方でした。GDPも可処分所得も伸びていたため、ひとりでもまだなんとかできたのです。しかし、若年層は違いました。企業が新規採用を縮小したこと、この時代の新卒者が団塊ジュニアというボリューム層だったことが重なり、未曾有の「就職氷河期」という状況へ。社会がバブル崩壊後の変化対応に追われるころ、若い世代だけがその荒波を受けていました。

家族や仲間とつくる身の回りの安心

98年の金融ビッグバンを契機に、GDPは急落。実収入も減少し、完全失業率も4%台へ。自殺者数は3万人を超えます。経済的な窮乏に加え、生活者の身の回りも揺らぎます。97年の神戸市須磨区酒鬼薔薇事件、98年の和歌山市毒物カレー事件など、地域生活を脅かす事件が続出。しかし生活者は【賢力】を駆使し、この環境変化に対応します。子供への教育投資や夫婦関係、家族関係の深化、地域生活の見直しなど。第一の安心「じぶん定め」に加え、家族や地域とのつながりを強化する第二の安心「まわり固め」へ。生活者は安心づくりの面を広げます。

注【賢力】とは…生活定点1992-2004俯瞰分析。バブル崩壊後の失われた10年といわれた時期に、変化に対し生活者が身につけた「賢い知恵」とそれを「実行・応用できる力」を「賢力」と呼んだ。

みんなでつくる世の中の安心

食の安全、都市の治安、学校教育など社会システムから、世界経済、地球環境まで。私たちのよって立つ社会が、その土台から大きく揺れています。それでも生活者はあきらめずに、行動を起こします。社会が揺らぐなら、自分達で鎮めればいい。一人ひとりの力が小さいのなら、みんなで作ればいい。自分達の手で、自分達のやれる範囲内で、揺らぎを生み出す世の中の「しくみ直し」を行っていく。このような、みんなでつくる世の中の安心を、「第三の安心」と呼ぼうと思います。個の安心から、全体の安心へ。生活者の安心づくりはさらに広がっていきます。

安心から、全体の安心へ。

第三の安心づくりの2つのアプローチ

ひとつ目は「余力蓄積型」。「ちりも積もれば山となる」という諺どおり、一人ひとりの小さな力、しかも余った力や知恵を、大きな動きに束ねていくアプローチ。社会善や正義といった共感性の高いテーマで、多くの人たちの参加が見られます。ふたつ目は「供給参加型」。主にモノやサービスの受け手だった生活者が、供給者という新しい立場、例えば、コンテンツの制作者、あるいは授業を教える先生などになる。そこで得られた気づきから、受け手と送り手の両方の立場を汲み取った建設的な提案を行っていくというアプローチ。地域運動やボランティア参加など、日ごろの社会人や家庭人と異なる立場から、気軽な供給側参加と社会への提案が活況です。

ソーシャル・リノベーションへの胎動

みんなで世の中のしくみを直すという「第三の安心」は、いわば生活者起点の社会修理であり、「ソーシャル・リノベーション」と呼べる行為です。自らの意思と行動による、こうしたソーシャル・リノベーションが今、いたるところで始まっています。地域の緑化運動、市民による図書館や美術館の運営、社会貢献商品の購買など、これらは決して政治的思想や義務感、自己犠牲に支えられたものではありません。新しい習慣のひとつであり、部分的、時限的な行動です。さらに言うなら、厳しい環境の中だからこそ、新たな希望を見出したい生活者の「しなやかな適応」と考えるべきでしょう。一人ひとりの価値観を侵さず、多様性を認めた上での連帯と互助こそが未来の社会像なのだと思います。

企業に求められるC to B発想

ソーシャル・リノベーションの時代において、企業に求められる役割とは何でしょうか？ それは単なる供給者を超えて、社会を修理していく生活者の協働者、パートナーになることです。「小さな尽力を束ね、大きな効果と成す」ことを目指す生活者への援助や場づくりが、企業にとっては新たな接点と絆にもつながるのです。これからは、生活者個人（Consumer）が投入する知恵や労力というリソースを、企業（Business）が組織化し、社会を修理する新しい社会資本形成に繋げていく、「C to B発想」が求められるでしょう。生存の基盤が崩れゆく中、手を結び合おうとする生活者。そこにどんなイシューを投げ込み、どんな連結図を描くのか、それが個々の企業のビジョンとなっていきます。

INSIGHTOUT

ROUND #8

生活総研

嶋本達嗣

高橋哲久

夏山明美

山本貴代

南部哲宏

吉川昌孝

古澤直木

笥 裕介

斎藤竜太

平澤広子

関沢英彦

藤原まり子

デザイン

松本哲治

株式会社ASTRAKHAN

校閲

株式会社円水社

印刷

日経印刷株式会社

2008年12月19日 発行

通巻9号

発行人

嶋本達嗣

発行所

株式会社博報堂

編集所

博報堂生活総合研究所

東京都港区赤坂5-3-1 赤坂Bizタワー

〒107-6322

tel.(03)6441-6450

<http://seikatsusoken.jp/>

Copyright 2008

Hakuhodo Institute of Life and Living.

Hakuhodo Inc.

All rights reserved

Printed in Japan